慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アダム・スミスの価値論に就いて
Sub Title	
Author	河上, 肇
Publisher	三田学会
Publication year	1913
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.7, No.1 (1913. 1) ,p.59- 88
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19130122-0059

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

資に依賴して國富開發の手段を講せざる可らざるの點及び輸入超過を繼續しつゝ尙ほ將來可なりに長き期間に渡りて國民經濟の權衡を維持するの途を講せざる可らざるは半世紀以前の米國の狀態に酷似せるもの少からず、現に鐵道事業の如き農工商を初め森林業漁業礦業等の發達に必要缺く可らざる根蔕たるに係らず、今日僅に五千餘哩の延長を見たるに過ぎず、卽ち我北海道を除きたる本國の面積に過ぎざる伊太利に比し僅か二分の一の鐵道延長を有するに過ぎざる次第にしてては以て我國民經濟發達の基礎尙ほ甚だ不充分なるの一證と見做すを得可し、此他港灣と云はず、電氣事業と云はず、殖產興業の根蔕的事業にして施設經營す可きもの少なからず、況んや製造工業の一般に於てをや、而して此等事業の着手進捗の爲めには外人の投資を歡迎せざるを得可からず、況んや之に依りて我兌換の基礎を維持せざる可らざるに於てをや、吾人は前桂內閣の盲目的外資輸入の弊害を見て爲めに神經過敏に陷りたる我國民は餘りに小膽なりと評せざるを得ざるなり。

アダム・スミスの價値論に就いて

河上肇

アダム・スミスの價値論は氏の大著『國富論』第一編第五章に述べてあるが、之は『國富論』中有名なる難解の一章である。嘗てホーナー (Horner) と云へる人は、之に就いて左の如く放言したと云ふ。

『國富論』第五章の議論は、六かしくて、分らんで、混亂して居て、何とも手の附けやうが無い。其の爲め吾々は、之が閱讀を中止せざるを得なかつた。…余は到底スミスを理解し得ぬことを發見すると同時に、忽にしてスミス自身が果して自らを理解し居たるやを疑ふに至つた。

We have been under the necessity of suspending our progress in the perusal of the Wealth of Nations, on account of the insurmountable difficulties, obscurity, and embarrassement, in which the reasoning of the fifth chapter are involved.....the discovery that I did not understand Smith, speedily led me to doubt whether Smith understood himself. (Memories and Correspondence of Horner, vol. I. p. 163. — Mecleod, The History of Economics, 1896 p. 92. 引ヲ所。)

余は之を一の放言と謂ふ。何故かなれば、かの『國富論』は吾々が一度通讀して理解し得られぬからと云つて、直ちに著者自らも理解して得なかつたものだらうなどゝ臆斷して、之が閲讀を中止すべきほど左迄價値なき著作に非ざるが爲めである。元來この『國富論』は、スミスが佛國旅行中に稿を起してより、歳月を費すこと正に十二年、其著『道德感情論』の末尾に之が公刊を豫告してより、星霜を重ぬること實に十八年、其間思索考究の爲め著者の心血を搾り盡して後、始めて公にされた世にも稀覯の書である。彼が二ヶ年半の外遊を了へて英國に歸つたのが一七六六年の十月。それより翌年の五月には鄕里のカーカルヂーに歸り、之より約十一ヶ年間、卽ち彼が四十四歳より五十歳に至るの間をば、彼は其母と從弟と共に、此の僻邑に歳月を迎へ且つ送つたのである。而して此の十一年間は、外から見ると誠に無爲の十一年間であるけれども、彼は此間に於いて讀み且つ考へることの爲めに非常なる奮鬪努力をしたのであつて、是が爲め彼の健康、彼の生命の消費されたること實に少くないのである。此間彼は思索に熱中するの極、折々滑稽を演じて、吾々に貴重なる逸話を遺した。彼がカーカルヂーに居た頃の或る日曜日

の朝の事である。彼は寢衣を着たまゝ庭に出たが、物を考へて居たと見へて、覺へず知らず小路を通つて遂に街道に出で、十五哩先きのダムファーラインと云ふ處まで來ると、其處の敎會では鐘が鳴つて多くの人々が續々とやつて來て居つた。そこで彼は其寺の鐘で始めて我に歸り、急いで宅に還つたと云ふやうな事も有つた。一七六七年の二月、彼が外遊より歸來して未だ鄕里に引込まざる頃の事、或日の朝、人ありて彼を訪問せしに、彼は將に朝の食事を始めやうと云ふ所であつたが、話をして居る中に、彼は麵麭と牛酪を取つて、それをぐる〳〵と丸めながら、やがて其を急須の中に入れて、其に湯をさした。何をするかと思つて見て居ると、暫くして彼は其を茶碗に注ぎ、一口飲んで顏をしかめながら、『こんなまづい茶は今まで飲んだ事が無い』と云ふから、客は笑ひながら、『其に違ひありませんあなたは茶の代りに麵麭とバターを入れておいでだものを』と云つたと云ふ話もある。是等の逸話に依つて、彼が如何に思索の爲めに全精神を傾倒して居たかゞ能く分ると思ふが、此事は恐ろしく彼の健康を害したのであつた。現に彼が一七七三年の春、『國富論』の原稿を携へてロンドンに出發した時は、彼はロンドンで少し手を

入れた後、直ちに之を印刷に附する考であつたのであるが、此時彼は鄉里を出發するに臨み、書を友人ヒュームに送つて、自分が死んだ場合の原稿の跡始末を細々と依賴し、そして其の手紙の最後には、『僕が極急に死なぬ限りは、今ま持つて行く原稿(これ國富論の原稿を指せるなり)は必ず君の方へ送り屆けることにする』と云つて居る。されば當時彼は、國富論の印刷の濟まぬ前に死ぬるかも知れぬし、又た俄に死ぬる樣な事があるかも知れぬと思つたのである。彼がカーカルデー塾居の十一年間に、如何に『國富論』の爲め其の心血を搾り盡したかは、只だ之のみを見ても能く分る。夫れ劍を執るの勇士は山河に血を流し、筆を執るの勇士は墨汁に血を滴らす。されば若し是等先哲の遺著を讀んで、輕々に之を批評し去る者あらば、そは學問道の地獄に墮つべき罪人共である。それは兎も角、スミスはヒュームに後事を托するの手紙を送つた後、鄉里を出發してロンドンに行つたが、扨てロンドンに行つて見ると、豫期して居たよりも色々の材料があつて、是が爲め彼は更に其の原稿の訂正增補に骨を折ることに爲り、遂に三ヶ年の歲月をばロンドンで費し、かくて一七七六年の三月九日に到り始めて公にされたものが、今世に傳ふる所の

彼の大著『國富論』である。彼は、彼が三年前其の原稿を抱いてロンドンに來る折、既に自己の死の遠からざるを信じた程に、其の精力を之に向つて傾け盡したのであるが更に其の殘餘の精力を搾り盡すが爲めに、實に三ヶ年の歲月をば重ねてロンドンの客舍に費したのである。凡て著書は、親の腹の中に宿つて居る期間が長ければ長いだけ、生れた後の生命も長いと云ふが、『國富論』の如きは實に最も長く著者の腹中に宿つて居たものである。されば其の發刊以來今日に至るまで猶ほ學者の熟讀を要求するの價値を有する、敢て怪むを要せぬ譯である。中に就き、第一編第五章は難解の章であるだけ、百年てのかた今日に至るまで、屢々學者の議論に上つたものである。古い所で一例を擧ぐるならば、マルサスが一八二三年に公にした『價値の秤量』(The Measure of Value. London.)の如きは、卽ちスミスの價値論の評論である。又た新しい所で一例を擧ぐるならば、本年(一九一二年)八月のThe Quarterly Journal of Economics の卷頭に出て居るマクドナルドの『アダム・スミスに就いてのリカードーの批評』なる一文も、矢張りスミスの價値論に就いての研究である。其の昔ホーナーは此章を讀みかけて、解らぬから止めたと云ふが、解らぬ

ながらも、猶ほ人を引くの力を有するものは此の一章である。思ふにスミスの著書には、全體を通じて斯かる難解の議論は稀である。否なスミスの議論は一般に明瞭で混亂した所は殆ど無いのであるに、獨り此章のみが其の例外を爲して居るのである。混亂した頭の人が混亂した議論をして居るのは、毫も注意の價値が無いが、ハッキリした頭の人が混亂した議論をして居るのは、吾等にとつて誠に思索の好材料である。殊に此の第一編第五章で吾々が問題として居る所には、改版の時に手が入れてあつて、スミスが色々と考へ惱んだ跡が、初版出版以後にも、猶ほ見へるのである。縱ひ議論が如何に混亂して居るにもせよ、斯かる混亂を惹起すが爲めに彼は實に多大の苦心を費して居るのであるから、眞面目に其の混亂の跡を辿ることは吾々後學にとつて好き修業の一と考へる。吾々は斯かる考から、スミスの價値論に就いて追々思索を費して見たいと思つて居るが、只今の所は別に深く考へた事がある譯でも無い。其故前置は長くなつたが、之から後の本文は極短い積である。

***

アダム・スミスの價値論には、哲學的 (Philosophisch) の部分と經驗的 (Empirisch) の部分と二つあつて、第一の處では勞働を以て價値の唯一の要素と爲し、第二の處では勞賃の外に地代及び利潤を以て價値の要素として居ると云ふのが、ヰーザーの說であるが (Der Natürliche Werth, 1889, Vorwort III.) 今ま此の見方の當れるや否やは姑く舍き、玆に論せんとする所は、ヰーザーの所謂スミスの價値論中哲學的の部分のことである。

スミスは『國富論』の卷首に『緒言及び本書の構造』と題する一文を載せて居るが、其の冒頭に彼は次の如く述べて居る。

『各國民の年々の勞働は、各國民が年々消費する凡ての生活上の必要品及び贅澤品をば供給する所の第一次の基本であつて、件の貨物は、或は其の勞働の直接の產物より成り、或は其の產物を以て他の國民より購買したる物より成る。』

此の一句に見はれたる思想は、種々の點に於いて大に注意すべきものであるが、他は姑く舍き、玆には彼が彼の斯かる根本思想をば如何に其の價値論に應用したるやを見んに、彼は『國富論』第一編第五章に於いて、次の如く述べて居る。

『凡ての物の本當の價格、卽ち其物を獲得せんと欲する人に對して本當に費用と爲る所のものは、其物を獲得する爲めの勞苦及び困難である。又た凡ての物が既に之を獲得し居り而して之を處理し又は之を以て何等か他物と交換せんと欲しつゝある人に對して、本當に價値ある點は、其物が其の所有者自身をして一定の勞苦及び困難を免れしめ、且つ之を他人に課せしめ得る點にある。……勞働は凡ての物に向つて支拂はれし最初の價格、本原的の代價である。世界の凡ての富を元と買ひ取りたるものは、金でもなく銀でもなく、只だ勞働である。而して其物が、現に之を處有し居り而して之を以て何等か新たなる生產物と交換せんと欲しつゝある人々に對して有する價値は、恰も其物が其等の人々をして購買し又は支配するを得せしむる所の勞働の分量と同じことである。』

The real price of every thing, what every thing really costs to the man who want to acquire it, is the toil and trouble of acquiring it. What every thing is really worth to the man who has acquired it, and who want to dispose of it or exchange it for something else, is the toil and trouble which it can save to himself, and which it can impose upon other people.....labour was the first price, the original purchase-money that was paid for all thing. It was not by gold or by silver, but by labour, that all the wealth of the world was originally purchased; and its

value, to those who possess it, and who want to exchange it for some new productions, is precisely equal to the quantity of labour which it can enable them to purchase or command. (Cannan's ed. pp.32,33.)

以上の文章の中、或は Price と云ひ或は Value と云つてある場合があるが、二者の間には別に重要な區別が立てゝある譯では無い。只だ彼は、吾々が獲得せんと欲する物に對して交換的に提供する物の方に就いて立言する時には Price なる語を用ひ、吾々が提供する物に對して交換的に獲得する物の方に就いて立言する時には Value なる語を用ひて居ると云ふ區別があるだけで、何れも共に彼の謂ふ Value in Exchange 又は exchargeable Value (交換價値)の意味である。蓋し彼は價値を分ちて使用價値と交換價値との二と爲し、例へば、水の如きは非常に大なる使用價値を有するも何等の交換價値を有せざるに反し、ダイヤモンドの如きは其の使用價値は極めて小なれども交換價値は非常に大なるものなりと論じて居るのであるが、使用價値に就いて述べて居るのは只だ其位の事で、他は凡て交換價値に就いてのみ論じて居るのである。乃ち前に掲げた文章の中に、或は價格と云ひ或は價値と云つて居るのも、矢張り此の交換價値の謂に外ならぬのである。

扨て之より前に掲げた彼の價値說に就いて、簡單なる批評を加へて見たいと思ふ

が、其に就いては一應交換價値の本質に就いて余の考を述べて置く必要がある。此考は、近頃余の公にした『經濟學研究』の序文にも記載した事であつて、茲に掲ぐる所は其に多少の修正を加へたに止る。

余の考に依れば、交換價値なる觀念は言ふまでも無く交換を前提としたる價値觀念である。故に交換を離れて交換價値なるものは無い。尤も茲に交換と云ふのは最も廣き意味のもので、卽ち收益に對して犧牲を提供する場合は、何時でも其處に交換が行はれたと見るのである。其故單に一人が孤立して居る場合にでも、人と人との間に於けると同じやうに、其人と其の外界との間に所謂交換が行はれるのである。例へば或人が一定の勞力を費して一定の貨物を作り出したならば、其の場合には其人の勞力と貨物との交換が行はれたと見るのである。勞力を費すと云ふのが犧牲であつて、貨物を得ると云ふのが收益である。況んや一定の人が他の人に對して一定の勞力又は貨物を提供し、其の代りに其の他人に對して一定の勞力なり貨物なりを獲得するならば、それは言ふまでもなく交換である。今まで物の交換に依つて決定せらるゝ物の價値は卽ち交換價値である。而して交換價

値の特色は、交換せらるゝ所の二物の價値は共に相等しきものとされ、二者は相互に其の價値を決定し秤量する關係に立つといふ點である。例へば甲なる貨物と乙なる貨物と交換せらるゝならば、甲の價値は乙であり、乙の價値は甲であるとせられて、甲乙二者の價値が代替性を有することに爲るのである。蓋し交換さると云ふ以上は、二の物が取替へられ得るのである。而して既に二の物が取り替へられ得らるゝのであるならば、其の二の物の價値は同じと見て差支ないのである。例へば一定の人が一定の時間を費して十尾の魚を捕へ得るならば、其の一時間の勞働の交換價値は魚十尾に相當し、又た魚十尾の交換價値は一時間の勞働に相當するのである。本來の事情より云へば、一時間の勞働に服せずして魚十尾を得ざるよりも、其の勞働に服して魚十尾を得る方が利益ありと考ふればこそ、其人は勞働を犧牲として魚を獲得する譯であるから、其の犧牲と收益との間には一定の價値の差額があるべき筈であるけれども、其の場合の價値なるものは、茲に謂ふ交換價値とは全く別種の價値である。前者は其人の心の內部に起つた價値判斷であつて、吾々が外部から之を客觀的に觀察して居る限り、到底其の眞相を知ることの

出來ぬもので、客觀的觀察を主眼とする自然科學的經濟學の與るを得ぬものである。猶ほ此の關係を明かにするが爲め、更に一例を擧げんに、例へば甲乙二人ありて、甲の所有せる貨物イと乙の處有せる貨物ロとが交換されたとするならば、それは全く、甲はイよりもロを價値大なりとし、乙はロよりもイを價値大なりとするが爲めであるので、其點から云へば、甲にとつても乙にとつても、イロ二物の價値は決して同一でないのであるが、其の場合の價値と云ふのは矢張り交換價値以外の價値に屬するものである。甲の心の內に入つて見ればイよりもロの方が價値大であり、又た乙の心の內に入つて見ればロよりもイの方が價値大である。卽ち或時は甲の心の內部に入つて見、又た或時は乙の心の內部に入つて見るならば、イよりもロが價値大であり、又たロよりもイが價値大である、併し吾々は甲の心の內部に入ると同時に、乙の心の內部に入るわけに行かぬからして、イがロよりも價値大であり又たロがイよりも價値大であると云ふ此の二の矛盾した見方は、決して同時に成立し得るものでは無い。されば斯かる見方から云へば、一般的にイがロより價値が大であるとも云へないし、つまりイロ二物の價値に就いては、一般的には何とも立言のしやうが無いのである。然るに交換價値に爲ると、之は甲乙二人者の何れもの心の內に立ち入ることなく、第三者の地位から客觀的に之を觀察して得來つた觀念であるから、甲乙二人が互にイロの二物を交換する限り、給付と反對給付とは相等しとされるので、卽ちイの交換價値はロに等しく、ロの交換價値はイに等しとされるのである。要するに、一方の人の心の內に入つて見れば、ロの方がイよりも價値多く、又た他方の人の心の內に入つて見れば、イの方がロよりも價値多けれども、其を第三者の地位に立ち之を傍より見て、イロ二物の價値相同じと看做す點に於いて、交換價値の客觀性が發生して來て、價値なるものが始めて自然科學的經濟學の研究對象と爲り得るのである。

交換價値なるものゝ本質は以上述べたるが如しと信ずる。されば、スミスが凡ての物の眞實の交換價値は其物の獲得に要する勞働に相當し、又た之を獲得したる後は、其物の交換價値は之を以て購買することを得べき他人の勞働に相當すと爲したるは、必しも誤謬と云ふを得ない。乍併、之と同時に吾人の注意すべきことは

其等勞働の價値は、前の場合には矢張り獲得さるべき貨物の價値に相當し、後の場合には所謂既に獲得され之より交換の用に供せんとさるゝ所の貨物の價値に相當すると云ふことである。スミスの缺點は、貨物の價値を勞働にて秤量し得る方面にのみ着眼して、其の勞働の價値が同時に又た貨物にて秤量され得る方面を看過した點にある。交換價値の相對性、珺環性を認めずして、却て絶對不動の標準を勞働に求めんとした點に在る。彼が將に獲得せんとする貨物の價値は之が獲得に要する勞働に依りて定まり、而して既に獲得したる後、之を以て他物と交換せんとする場合に於いては、其物の價値は將に交換されんとする他物の生産の爲めに要せし勞働に依りて定まると云ふが如く、場合に依りて其の立言の地歩を異にするの説明を爲さゞるを得ざるに至りしも全く是が爲めである。マルサスは前掲の著書の冒頭に、スミスの價値論を批評するに至りし理由を列擧して居るが、其の第一の理由として次の如く述べて居る。

In laying down labour as a measure of value, it is allowed that he does not make it quite clear, whether he means the labour which is worked up in a commodity, or the labour which it will command; yet they are essentially different.

誠にマルサスの言の如く、或る貨物を生産する爲めに費した勞働と、其の貨物で購買することを得る勞働とは、全く違つたものである。例へば余が一日の勞働を費して或る貨物を生産した場合に、余は其の貨物をば他人に與ふる代りに、其の他人をして余が爲め二日の勞働に服せしむることが有り得る。故に其の貨物の交換價値は、前の場合には余が一日分の勞働に相當し、後の場合には他人の二日分の勞働に相當す。又た余が勞働の交換價値は其の貨物一個に相當すると同時に、他人の勞働の交換價値は其の貨物半個に相當するのである。勞働が價値の尺度に爲ると云ふことには、これ以上の意味は有り得ぬのであるが、只だスミスは、凡ての貨物は皆な勞働に依つて獲得さるゝものと、考へ、つまり廣義の交換には、何時でも其の一方の對價と爲るものが勞働であると考へた爲めに、特に勞働に着眼し、遂には之を以て價値の絶對の標準であるかに考へ及んだのである。

* * * * * * * * * *

而して此點に就き更に注意すべきは、彼は價値の絶對の標準を勞働に求めしが爲

めに、進んでは勞働の價値を以て不變のものなりと說くに至つた點である。彼は、金又は銀は其物の價値が變動する爲めに、他の貨物の價値の精確なる標準と爲り得ざることを論じたる後、進んで次の如く述べて居る。

『同一分量の勞働は、凡ての時及び所に於いて、其の勞働者に對し同一價値のものであると云ひ得らるゝ。〔第一版には、同一價値のものでなければ爲らぬとあつたのを、第二版以後には此の如く改めてある〕、其の健康、腕力及び精神の平常の狀態に於いて、又た其の熟練及び巧妙の平常の程度に於いて、〔以上の二句、第二版の際增補の文句〕勞働者は常に其の安樂、其の自由及び其の幸福の同じ割前を提供しなければならぬ。されば其の勞働の報酬として彼の受け入るゝ所の財の分量は如何に變ずとも、彼の支拂ふ代價は常に同一である。同一分量の勞働で、或時は多くの分量の財を獲得し得、或時は僅かの分量の財を獲得し得るに止ることは、實際に起ることであるが、併し變ずる所のものは財の價値で、其財を獲得する所の勞働の價値では無い。凡ての時及び所に於いて、生產に困難な物又は之が獲得に多くの勞働を費す物は高く、容易に得られ、又は極僅かの勞働で得らるゝ物は安い。されば只だ勞働のみが其れ自身の價値を變ぜざるもので、此の勞働のみが、凡ての時及び所に於いて凡ての貨物の價値を評價し且つ比較する爲めの最後の且つ眞實の標準である。勞働で秤つたものが其の眞實の價格で、貨幣で秤つたものは其の名目上の價格に過ぎぬ』

Equal quantities of labour, at all times and places, may be said to be (Ed. I reads equal quantities of labour must at all times and places be) of equal value to the labourer. (In his ordinary state of health, strength and spirits; in the ordinary degree of his skill and dexterity,) he must always lay down the same portion of his ease, his liberty, and his happiness. The price which he pays must always be the same, whatever may be the quantity of goods which he receives in return for it. Of these, indeed, it may sometimes purchase a greater and sometimes a smaller quantity: but it is their value which varies, not that of the labour which purchases them. At all times and places that is dear which it is difficult to come at, or which it costs much labour to acquire; and that cheap which is to be had easily, or with very little labour. Labour alone, therefore, never varying in its own value, is alone the ultimate and real standard by which the value of all commodities can at all times and places to be estimated and compared. It is their real price; money is their nominal price only. (Canman's ed. p. 35.)

此の如く、彼は勞働を以て價値の眞實の尺度と論じて居るが、更に他の所に於いて

は勞働を以て異りたる時代に於ける價値を比較するの標準とも爲る旨を論じてる。彼曰く

『價値の尺度として一般的の且つ精確のものは、勞働を舍いて外には無い。即ち勞働は吾々が凡ての時及び凡ての處に於いて種々の貨物の價値を比較し得る唯一の標準である。言ふまでもなく吾々は、世紀を異にせる種々の貨物の眞實の價値をば、之と交換せらるゝ所の銀の分量に依つて比較することは出來ぬ。又た穀物の分量に依つて、其の年々の價値を比較することも出來ぬ。只だ、吾々は勞働の分量に依つてのみ、最も精確に、世紀毎に將た年毎に價値の變動を比較することが出來る。』

Labour.....is the only universal, as well as the only accurate measure of value, or the only standard by which we can compare the values of different commodities at all times and at all places. We cannot estimate, it is allowed, the real value of different commodities from century to century by the quantities of silver which were given for them. We cannot estimate it from year to year by the quantities of corn. By the quantities of labour we can, with the greatest accuracy, estimate it both from century to century and from year to year. (Cannan's ed. p. 38)

以上述ぶるが如く、スミスは勞働の價値を以て一定不變のものなりと爲し、之を以て the real measure and standard of exchangeable value として居るのであるが、之に就いては種々の疑問を起すことが出來る。

第一に、彼が勞働の同じ分量 equal quantities of labour とゝふのは果して如何なる意味であるか。何を以て勞働の分量を秤量する積りであるか、此點が先づ疑問である。彼は此點に就いて何等の説明を加へて居らぬから、先づ時間を標準としたものとでも考へて置くの外は無い。尤も彼は他の場處に於いて、現實の交換價値を標準とし、例へば甲の一日の勞働と乙の二日の勞働と交換せらるゝならば、甲の一日の勞働と乙の二日の勞働とは同じ分量のものであると看做すと云ふが如くに見ゆる所もあるが(註一)併し若しさうであつたならば、同じ分量の勞働、從つて同じ價値の勞働とせらるゝものゝ内容が現實の社會に於ける實際の交換を俟つて始めて定まる譯となるから、そは交換價値の秤量に向つて何等絶對的の標準を提供せざることゝ爲る。余の考に依れば、現實の事情は正に此の如くであるけれども、併しさうだとしては、始めからスミスの議論が無意味に爲つて仕舞ふのである。要するに、何を以て同じ分量の勞働とすべきか、之が抑々の疑問である。或は勞働

者の苦痛を標準とする積りかとも思はるが、それならば又た其で缺點が出て來る。便宜の爲め其事は次の項目、以下の所で述べやう。

（註一）It is often difficult to ascertain the proportion between two different quantities of labour……It is adjusted, however, not by any accurate measure, but by the higgling and bargaining of the market, according to that sort of rough equality which, though not exact, is sufficient for carrying on the business of common life (Cannan's ed. p. 33).

第二に、彼は同一分量の勞働は、其の勞働者に對し同一價値のものであると云ひ得らるゝと云つて居るが、茲に價値といふのは果して如何なる意味のものである乎。前にも既に述べたる如く、彼は價値を使用價値と交換價値とに分ち、而して專ら交換價値のことのみに就いて論じて居るのであるから、茲に謂ふ所の價値も亦た交換價値の意に解するのが順序であるが、若しさうだとするならば、彼は茲に同一分量の勞働は常に同一價値を有すと云ひ居れるが故に、其の勞働は何等かの物と常に同一の比例に於いて交換されつゝあるものと考へたと見なければ爲らぬ。然らば此の場合、勞働との交換に於いて彼は果して何物に着眼したかと云ふに、彼の議論を合理的に解釋する爲めには、勞働の苦痛に着眼したと見るの外は無い。而して彼が同一分量の勞働は其の勞働者に對して同一價値のものであると特に說明して居る點から云へば、恐らく斯く解釋するのが彼の眞意を得たもので有らう。

卽ち余は解釋して、彼は勞働者が同一分量の勞働を爲すが爲めに、其の忍ぶ所の苦痛其の犧牲とする所の快樂は常に同一であるが故に、其の勞働の價値は其の勞働者に對して同一の價値を有すと看做したものと考へる。而して斯く解釋するに就き更に注意すべきことは、茲に謂ふ所の同一分量の勞働とは何を意味するかゞ抑々の疑問であつて、之に就いては前にも述べし如く二三の解釋があり得るのであるが、其中で、勞働者の苦痛を標準とするものとの解釋は、彼の議論をば本項に述ぶるが如く解釋する限り、最も能く前後の脈胳を貫通するものなりと云ふことである。若し同一分量の勞働と云ふ意味をば右樣に解釋するならば、つまり其の勞働に服する者が同一程度の苦痛を感ずるだけの勞働をば卽ち同一分量の勞働と看做すのであるから、前に述べし如き理由に本き、其の所謂同一分量の勞働は、其の勞働者に向つて常に同一價値を有するものと云ひ得らるるのである。併し此の如く勞働の分量を秤量する標準をば、勞働者の苦痛と云ふが如き勞働者自身の主觀的事情に置くことにすれば、其の主觀的事情は人を異にするに依つて相違する

から勞働の分量を表示すべき一般的客觀的の標準は無くなつて仕舞ふ理である。併し之は、各個人の主觀的事情は互に相違するものと看做しての論であるが、スミスは恐く此の主觀的事情の相違を殆ど無視して、各個人は皆な一樣(ホモジニアス)のものであると看做したので有らう。而して既に各個人を以て凡て皆な一樣のものなりと爲し、以て個人間に於ける主觀的事情の相違を無視することゝせんか、殘る所は、其の一樣なる個人の主觀的事情の時の關係に於ける差異又は變化を無視するの必要である。是に於いてか、スミスは其の『國富論』の改版の際に、先きに指摘し置きたるが如く、『其の健康、腕力及び精神の平常の狀態に於いて、又た其の熟練及び巧妙の平常の狀態に於いて』と云へる條件を新たに挿入して居るのである。之を要するに、各個人は凡て一樣のものなりと前提し、更に其の一樣なる個人の平常の狀態に就いて述ぶれば、一定の勞働を爲すが爲め各個人の負擔する所の苦痛は、凡て一定し居るものと看做すことが出來る。故に勞働の價値といふことをば、其の勞働を爲す者が之に依つて蒙る所の苦痛の犧牲に依つて秤量したる價値といふ風に解釋するならば、一定の勞働は常に一定の苦痛と交換せらるゝ理に爲るのであるから、つまり同一分量の勞働の價値は常に同一であると云へぬこともなくなるのである。

第三、スミスは以上の如く考へたものだと一應は解釋せらるゝが、併し果してさうだとするならば、此點に彼の大なる誤解が横はつて居る。何故かなれば、交換價値なるものは、一物の價値を他物で秤量したものである。然るに勞働と勞働の苦痛との關係は、勞働と勞働の結果たる生産物との關係と云ふのとは、全く其趣を異にして居る。少くとも勞働の苦痛といふは、其の勞働に服しつゝある人の感じで全く主觀的のものであるから、其の苦痛を標準にして定められた勞働の價値なるものは、矢張り主觀的のものたるを免れぬ。其の生産物又は勞賃を標準にして定めた客觀的の交換價値とは、全く其の性質を異にして居るのである。勞働の價値を立て方から云ふと、如何にも客觀的の交換價値が現はれるやうであるけれども、其の實は主觀的の價値に過ぎぬのである。されば、スミスが同一分量の勞働は其の勞働者にとりて常に同一價値のものなりと云つた場合の價値なるものは、他の場

合に價値と云つて居るものと全く性質の違ふものを、何等の斷りなしに同じ言葉で言ひ表はして居るものと見なければ爲らぬのである。而して既に茲に謂ふ所の價値なるものが純主觀的のものである以上、其のものに客觀性は無い理であるから、たとひ其が一定不變であつて、價値の尺度と爲り標準と爲るものだと云つた處が、交換價値の決定の理法にとつては、何等の説明、何等の解釋にも爲らぬ次第である。

第四、若し又た、同一分量の勞働は常に同一價値のものであると云へる場合の價値なる語をば、本當の交換價値の意に解するならば、同一分量の勞働は決して同一の價値を有たぬものである。蓋し假りに同一分量の勞働に依つて各人の蒙る所の苦痛の程度は凡て同一であるとしても、其の勞働の効果に種々の差異があり得る。卽ち勞働の効果は、人に依つて相違し、又た時に依り、處に依つて相違する。例へば或者は同じ一時間の勞働に依つて魚三十尾を捕ふるに、或者は僅に十尾を捕ふるに止る場合がある。又た道具や機械の進歩した時代には、其の生産額が非常に殖へて來るのみならず、同じ人が同じ生産法の下に働く場合でも、魚の澤山取れる場

處とさうで無い場處とがある。今まで一定の人が一定の勞力を費して魚を捕ふる場合に、若し其の勞働と魚との間に交換が行はれて居るものと見るならば、魚の交換價値は勞働に依りて量られ、勞働の交換價値は魚に依りて量らるゝことに爲る。畢竟交換價値なるものは、前にも述べし如く、二個の分量の比較に依つて成り立つのであるから、其の二個の中、何れか一方の分量が變れば、双方の交換價値が必ず同時に變つて來るので、一方のものゝ交換價値のみが其れ自身に於いて一定不變であるといふ事は、交換價値そのものゝ觀念から云つて、本來あり得べからざることである。スミスは『同一分量の勞働で、或時は多くの分量の財を獲得し得、或時は僅かの分量の財を獲得し得るに止ることは、實際に起ることであるが、併し變ずる所のものは財の價値で、其財を獲得する所の勞働の價値では無い、……只だ勞働のみが其れ自身の價値を變せざるものである』と云つて居るけれども、之は恰も『太陽と地球との距離は常に變化するが、變化する所のものは地球の太陽に對する距離で、太陽それ自身の距離は全く變ぜざるものである』と云ふと同じことで、全く意味を成さぬ立言である。太陽それ自身の距離と云ふ代りに、太陽それ自身

の位地と云へば始めて意味を成す如く、勞働それ自身の價値と云ふ場合の價値を
ば、交換價値の意に解せずして主觀的價値の意とすれば、始めてスミスの言も意味
あることゝ爲るが、併し主觀的價値の意に解するならば、交換價値の客觀的標準と
して彼が云ふが如き尺度たる性質を有するものに非ざることは、前既に述べし如
くである。

第五、以上述ぶる所に依つて考ふれば、一般貨物の交換價値にして變動する限り、或
る一物の價値のみが一定不變であるといふ事は在り得べからざることである。
例へば一般物價の騰貴は卽ち貨幣の交換價値の下落であり、一般物價の下落は取
りも直さず貨幣の交換價値の騰貴であるが如くである。されば交換價値の秤量
に就いて問題と爲るのは、只だ如何なる物を標準として諸種の物の交換價値を言
ひ表はすべきか、言ひ換ふれば何を以て交換價値の共通の尺度（コンモン、メジュアー）と爲すべきかと云
ふことであるが、今ま此の問題に就いてスミスの說は如何なる價値があるかと云
ふに、彼の說は、個人孤立の場合又は人數全體を一全（エ、ホール）のものと見たる場合に、始めて
意義を有して來る譯である。蓋し個人孤立の場合又は人類全體を一全のものと

見る場合ならば、凡ての生產物は只だ勞働に依りてのみ生產され、言ひ換ふれば勞
働のみが唯一の生產費であり窮極の犧牲である理ゆへ、スミスの如き見方を採る
の外は無いのである。現に今日田舍では、物の價値をば何人分のねうちがあると
云ふ風に、勞働を標準として居る所がある。之は一は自足經濟がまだ廢れずに居
て、經濟が孤立的性質を有して居るのと、今一は勞働が單純で人々の間に品質の差
異が少いからである。之と同じく、人類全體を一全のものと見て論を立てるなら
ば、どうしても價値の標準を勞働に求めなければ爲らないので、マルクスの價値論
の如きは卽ち其の一例である。乍併、今日の實際に於いては、個人が孤立して居る
譯でもなく、又た人類全體が一全のものと爲つて居る譯でもなくて、個人個人の間
には財產の私有及び貨物の交換といふ事が廣く行はれて居り、且つ其の交換の媒
介物としては貨幣なるものが廣く授受されて居るのであるから、物を獲得する爲
めに何時でも其の犧牲として提供せらるゝ物は、實際に於いては勞働では無くて
貨幣と爲つて居る。從つて物の交換價値は、勞働で秤量されずして、專ら貨幣で秤
量され、かくて貨幣なるものが所謂凡ての物の價値の共通の尺度と爲つて居るの

である。而して此點は現にスミスの認めて居る所であるが（Canman's ed. p. 34）然らば此の貨幣にて秤量したる物の交換價値は、勞働にて秤量したるものと果して同じきや否やと云ふに、スミスは同じ時及び同じ場處に於いては、二者相同じと云ふのである。彼曰く

『同じ時及び處に於いては、凡ての貨物の real price と nominal price とは相互に全く正比例を保つものである。例へばロンドン市場に於いて或る貨物を提供して一定の貨幣を得るならば、吾々が其時其處に於いて購買し又は支配し得る勞働の分量は、丁度其の貨幣の分量に比例するものである。されば同じ時及び處に於いては、貨幣は凡ての貨物の眞實の交換價値の精確なる尺度である。しかし其の然ることを得るは、只だ同じ時と同じ處に限らるゝ。』（Canman's ed. p.39.）

乍併、實際に於いては、貨幣で秤量された物の交換價値なるものは、決して其物の爲めに費されし勞働の分量に比例して居る譯では無い。現に土地そのものは天與の賚で、元と人間の勞働に依つて作り出されたものでは無いが、しかも其物が少からざる交換價値を有して居る。殊に市街地の交換價値の如きは、其の土地の上に

加へらるゝ勞働と何等の關係なくして次第に騰貴するの傾向を有して居るのであるから、スミスの說は到底是等現實の現象を說明するに足らぬのである。尤も玆に揭げた彼の一文を見る時は、其の勞働と云ふは、例へば土地の上に加へられた勞働のことでは無くて、其の土地と交換せられ得る勞働を指して居るが如くにも見ゆるが、若し單に其れだけの意味であるとするならば、同じ時及び同じ所に於いては、凡ての物の交換比例が一定して居る理であるから、種々の物の交換價値は、之を勞働で秤量しても、貨幣で秤量しても、乃至如何なる物で秤量しても、皆な同じ比例に爲るのは始めから自明の理で、彼の議論は殆ど意味なきものと爲つて仕舞ふのである。

以上を以てスミスの勞働價値論の批評を終る。而して是等の批評は、彼の議論を以て凡て現實の現象の說明を目的とせる sein の議論であると看做しての批評であるが、若し之を以て價値の理想を論じたる sollen の議論であると看做すならば、自ら又た別種の批評を必要とする理である。併し今は之に論じ及ぶの遑なきが故に、先づ以上を以て此稿を完結する。

（元、一二〇二五歳將に暮れなんとして歸省の途に就かんとするの日、之を稿了す。）

英國々民保險法に於ける失業保險制度

堀江歸一

一

英國々民保險法(National Insurance Act, 1911. 1 & 2 Geo. 5. Ch. 55)が國民健康保險と失業保險と二種の保險に對する規定を包容すること、既に世人の知る所の如し。社會保險若しくは勞働保險の祖國たる獨逸帝國の制度に於ては、疾病、老年、癈疾、變災遺族扶助等各種の項目に對して、保險の規定を設くと雖も、獨り失業の一事に對しては、其勞働者の生活に於て、重大なる危險を及ぼすに拘はらず、未だ之を保險の一項目とするに至らず。國家の全體より見れば、獨逸と雖も、敢て失業保險其もの を闕却するものに非ず。此問題は屢々帝國議會の討議に上り、討議者の多くは「ゲント」制度を帝國に採用するを可なりとする意見を陳述したり。蓋し、「ゲント」制度と稱するは、市政府に於て職工組合に補助金を交付し、組合員間に保險の利益を與ふることを主眼とするものなり。而して之を獨逸帝國に採用す可しと云ふは、畢竟